

文 作

作文の部 講評

作文の部では、今年度は、市内各校園並びに一般の方を含め、総数二〇〇〇を超える作品数となりました。

小学校低学年では日常生活の中でのあいさつやふれあいの大切さ、また家族の温かさを感じています。そして学年が上がるにつれ、次第に思いやりや気遣いが芽生えています。また、広島での平和学習が彼らに大きなインパクトを与えたことも感じ取れました。

中学生になるとLGBTQ・障がい者差別等々の具体的な差別問題に関心に移り、どうすれば差別や偏見がなくなるのか深く考えるようになっていきます。

高校生ではさすがに国内のみならず世界に目を向け、各地の紛争や差別などの人権侵害に対し強い危機感や憤りを感じています。

子どもたちは各年代において、その時々体験や学習により思考が変化していきます。今後とも各場面において繰り返し学習していくことが期待されます。また、作文部門としては初めて英文での応募があり、多様性の社会を実感しました。

《特別賞》

ほのぼの賞

「友だちっていいな」

石山小学校

一年 八 田 咲 来

すこやか賞

「二人ひとりの行動で世界は変わる」

滋賀大学教育学部附属小学校

六年 中 岡 沙 綾

ふれあい賞

「大切な人を守る」

田上中学校

三年 浅 田 遥

ときめき賞

「言葉の力」

逢坂小学校

四年 逸 見 亮 太

さわやか賞

「多様性を受け入れることで、
尊重と平等の未来を創造する」

一般 アスラ・ファリス

△以上 特別賞 五点▽

《特 選》

「ぼくの友だち」

瀬田小学校

三年 黒 瀬 良 洋

「男女差別をなくすために」

青山小学校

五年 荒 川 楓 夏

「なぜ、何のために」

堅田中学校

一年 赤 井 穂乃花

「トランスジェンダー」

田上中学校

二年 島 田 琉 璃

「『破戒』から学ぶ人権問題」

東大津高等学校

三年 米 田 友 夏

△以上 特選 五点▽

《佳 作》

「私が思う人権について」

日吉台小学校

四年 野 木 環 希

「私の幸せな時間を守るためにできる事」

比叡平小学校

六年 吉 田 野 乃

「自分の言葉に責任を持って」

堅田中学校

一年 東 條 陽茉理

「言葉」

堅田中学校

二年 村 長 夏 実

「部落差別」

東大津高等学校

三年 田 村 緋 彩

△以上 佳作 五点▽

特別賞 ● ほのぼの賞

友だちっていいな

石山小学校

一年 八田 咲 来

わたしは、友だちがいつしよにあそんでくれたり、あいさつをしてくれたりしたときに、友だちっていいなとおもいました。なぜなら、友だちがやさしくしてくれるとうれしいからです。こえをかけると、いったほうもいわれたほうも、うれしくなります。これから、やさしいことばをいっぱいつかいたいです。

もし友だちがいなかったら、一人ぼっちになってさびしくなります。さびしくならぬように、これからもいじわるをしないように気をつけたいです。たたいたりけつたりしないようにしたら、みんなよい気もちになって、あたらしい友だちがいっぱいできるとおもいます。

たくさんの友だちとなかよくしたいです。

特別賞 ● すこやか賞

一人ひとりの行動で世界は変わる

滋賀大学教育学部附属小学校 六年 中岡 沙綾

あなたは、「人権」と聞いてどんなことを思い浮かべますか。私だったら、「悲しい気持ちになる人がある」「何となくあいまいでわかりにくい」「少し難しい」「自分にどう関係があるのか」などのイメージを持ちます。でも、このようなイメージのままでは「誰も悲しい思いをしない世界」を創ることはできないと私は思います。それでは、どうしたら「誰も悲しい思いをしない世界」を創れるのか考えました。

そもそも、「人権」とは、「人間が人間らしく生きる権利で、生まれながらに持つ権利」であり、誰にとっても身近で大切なもの、違いを認め合う心によって守られているものです。また、自分の思ったことを自由に発言すること、自分の好きなように生きること、自由に学ぶこと、自分が選択することは、すべて私たちが持っている権利でもあると思います。この「人権」は、日常で守られているのでしょうか。私は、守られていないと思います。なぜなら、日常の中で「ちよつとした悪口」や「ちよつとしたふざけ合い」を素通りしてしまっていると思ったからです。「だまれ!」「ばか、あほ」などの言葉は、テレビを見ていても、学校・家で生活していても何度か聞かえてくる言葉です。この言葉が聞かえた時、あたり前の様に過ごしていないか自分の生活を振り返りました。すると、何もできていなかった自分に気付きました。そんな時に、「一言」でも「一つの行動」でも一歩を踏み出していたら、何か生活が変わったかもしれません。

他にも、私が「人権侵害」について最近感じたことがあります。「下手くそ!」「やられたら、やりかえせ!」「どうせ○○なんだから!」これはバスケの試合で発された、厳しい言葉です。このような言葉を私が聞いた時、すごく嫌で悲しい思いをしました。悲しい思いをしたのは、私だけではないと思います。聞いていた人や、発言している本人も実は、いい気持ちではなかったと思います。「たった一つの言葉」「ささいな行動」で、周りの人も自分も傷つけてしまうのです。そんな「人権問題」をなくすためには、「相手に伝える言葉を慎重に選んで伝えること」「悪口など人が悲しい思いをするような言葉が聞かえてきた時に、注意したり、友だちの支えになったりする」など自分で考えて行動することが大切になってくると思いました。

このように、「誰も悲しい思いをしない世界」を創るためには、国や県の取り組みも必要です。しかし私たち、一人ひとりが身近な人権問題に気付き、どのように解決したらよいのか、自分の考えを持つことが大切です。

私は、その一歩を踏み出せる人になります。

大切な人を守る

田上中学校 三年 浅田 遥

「臭い」と今にも言いそうな大人たちの冷たい目を私は忘れない。

私には大好きな曾祖母がいました。小さい頃から沢山遊んでもらい、ご飯もおいしく、いつもおしゃれで、お茶やお花、お琴に組紐、何でもできる歳の離れた友だちのような私の憧れの女性でした。

元氣だった曾祖母が急に坂道を転がり落ちるように弱り、歩くのもやっとの状態になっていた夏の日、

「今日は体調が良いから高島の親戚の家まで一緒に出かけてみようかな」

と曾祖母がつぶやいた。私と母と三人で電車に乗り楽しいお出かけになるはずだった。

電車に乗ると体調が悪くなった曾祖母はトイレに母と駆け込んだ。そして何十分も二人はトイレから出てくることなく時間だけが過ぎ、降りる駅も知らない私は不安な時間を一人で堪え忍んだ。

トイレからやっと出てきた二人は、電車の隅で目的の駅に着くまでじっと耐えていた。トイレには入ったが、間に合わなかったのだ。

人は誰でも老いが来る。身内であれ他人であれ、困っている人を見たら勇気を持って声を掛ける。自分には関係ないと思っても、いずれ誰もが直面するであろう介護問題。介護する側にもされる側にもなっていくだろう。

高齢者に対する介護施設や家庭などでの身体的、心理的虐待も問題となっている。介護を理由に身内を死傷させてしまうニュー

スが後を絶たない。一人で困難を抱え込み、虐待をしてしまう。私たち一人ひとりが助け合い支えあい、介護に対して皆が協力し合える社会をつくるのが大切なことだと思う。歳を重ねたからと言って人権が無くなるわけではない。全ての人が生まれながらにもっている権利なのだから。

今年私は修学旅行で沖縄に行き、命の大切さについて深く考えるきっかけとなった。

私たちの世代の死因の一位は自殺なのはとてもつらい現実だ。誰もが悩みを抱えているけれど、その悩みは人それぞれで、自分が傷つかない言葉でも、他人にとっては心が傷ついてしまう悲しい言葉なのかもしれない。簡単にSNSに打ち込んでしまう文字や絵文字が、受けとる人によっては、忘れられない映像として頭に残ってしまうかもしれない。いじめは加害者がいじめていると自覚しているものより、自覚していないもののほうがはるかに多いと思う。周りに居る人たちが、見て見ぬふりをする傍観者になってはいけない。いじめを防止するために自分がどう行動すべきか考え、行動に移す勇気が必要だと思う。

大切な人の命を守るため、助けを求める友の声に耳を傾け、時に励まし、温かい手をさしのべられる権利がある。自分の持つ権利を最大限に使って人を助けられる大人になりたい。

(原文)

Asraa Faris
Embracing Diversity: Creating a Future of Respect and Equality

Have you ever seen a Momiji leaf blame another leaf for its different color? Or does a rose blame another flower for smelling better? No, for they know that each adds its unique beauty to the garden. Just like a garden thrives on its diversity, so does our world.

Since our existence, many things have changed. Back then, in a world of limited resources and constant threats, caution toward anything that looked unfamiliar was crucial for our survival.

In those days, to ensure our survival, we were taught to define who our people were and to protect them at all costs, even if it was at the expense of others. While such behaviors may have been essential in the past, they no longer hold true.

In today's interconnected world, where we are constantly surrounded by diversity, survival no longer depends on caution from what we consider different but on acceptance and respect. Look around, and you will be amazed by the diversity of people: people from different backgrounds, cultures, languages, genders, ages, and different colors. While these differences seem thrilling and unfamiliar at first, look beneath them, and you will be amazed by how similar people are. People who, regardless of their differences, status, and positions, have the same needs, the same dreams, the same fears, and the same desire to be valued and accepted.

Today, to build a bright and flourishing society, we must go beyond simply tolerating these differences; we must celebrate them. Respecting and protecting the rights of everyone, regardless of their background, gender, age, and abilities, is not just an ideal but a necessity. By celebrating our differences and our shared humanity, we can ensure that no one is left behind and that human rights are upheld for all.

多様性を受け入れることで、尊重と平等の未来を創造する

一般 アスラ・ファリス

モミジの葉が、色が違うからと他の葉を責めるのを見たことがありますか？あるいは、バラが他の花のほうが香りがいいからと責めるのを見たことがありますか？

それぞれが庭に独特の美しさを加えてくれることを知っているからです。庭が色とりどりの草花によってにぎわうように、私たち人間の世界も多様性によって栄えます。

人類が誕生して以来、多くのことが変化しました。狩猟時代、捕れる食べ物が限られ、常に命の危険にさらされていた時代では、見慣れないものに対して警戒することが生き残るために不可欠でした。その当時、生き残るために、私たちは自分たちの仲間が誰であるかを決め、仲間と違う者とは闘い、どんな犠牲を払ってでも自分たちの集団を守ることを大切にしていました。そのような行動は過去には不可欠だったかもしれませんが、今の時代には当てはまりません。

現代の世界は、多くの国々がつながりをもっています。この世界で生き残るためには、もはや自分たちとは異質であると考えるものに対して警戒するのではなく、受け入れと尊重が必要です。周りを見渡してみると、人々の多様性に驚かされます。さまざまな背景、文化、言語、性別、年齢、肌の色を持つ人々がいます。これらの違いには、最初は馴染みがなく驚くかもしれませんが、その本質を見てみると、人々がいかに似ているかに気づかされるでしょう。地位、立場に関係なく、人々は同じ欲求、同じ夢、同じ恐怖、そして他者から認められ受け入れられることへの願望を持っています。

将来、明るく繁栄した社会を築くためには、これらの違いを単に容認するだけでなく、それを祝福しなければなりません。背景、性別、年齢、能力に関係なく、すべての人の権利を尊重し大切にすることは、単なる理想ではなく、必要不可欠なことです。私たちの違いと共通の人間性を祝福することで、誰も取り残されず、すべての人の人権が守られることを保証できます。

将来を見据えるとき、人類の強さは同一性ではなく違いにあることを忘れないようにしましょう。モミジの葉の鮮やかな色やバラの繊細な香りのように、私たちの多様性は私たちが共に生きる世界に意味と美しさを加えます。違いを受け入れて尊重することで、すべての個人が認められ、評価され、独自の才能を発揮できる社会となり、人権を尊重する世界が、すべての人にとって夢ではなく現実とすることができるようになります。

言葉の力

逢坂小学校 四年 逸 見 亮 太

ぼくは、道徳のじゅ業で言葉の良い言い方と悪い言い方について学びました。自分でも言葉について考えてみることにしました。

ぼくは、日ごろ友だちとの会話は悪い言い方をしないように気をつけています。だけれど友だちとふざけ合ったりしてしまった時に「お前」や「はあ？」などの言葉をつかってしまう時があります。その言葉がたまに口ぐせになっっている自分があります。そして道徳のじゅ業で先生の話を聞いている時、ハツと思いました。そういつた言葉が出ている時は、自分がかっこいい言葉だと思って発言しているのではないだろうかと思いました。今、多くの言葉やその意味について学校で学んでいます。まだ分からない言葉がたくさんあります。けれど、インターネットやテレビで良くない言葉をたくさんの方がつかっていてなんとなくかっこいいとかんちがいしてつかってしまっている自分がとてもこわいなと思いました。

けんかや言い合い、いじりは、全て良くない言葉が火種になっている時があります。それはいじめにもつながってしまうことがあります。自分がそんなつもりではないと思っただけで言った言葉も、相手がいやだと思っただけでそれは心をきずつけてしまっています。

ぼくは、「言霊」という言葉を小さい時からよく家で耳にしていました。自分が言ったことは自分に返ってくると思っただけで人と接してきました。言葉に不思議な力があると思っています。

言葉は人に元氣やゆう気をあたえてくれますが、人を悲しませたり立ち直れなくさせたりすることもあります。だからこそ言葉の持っている意味をしっかり学んで、正しいつかい方をしなければいけないと思います。言葉の持っているエネルギーや力を良い方向にいつも向けていければいいなと思いました。温かい言葉「ありがとう」「大じょうぶだよ」「上手だね」「安心するよ」という言葉をいっばいつかって、相手の立場を思っただけで心のつながりを大切にしていきたいです。

道徳のじゅ業を通して自分をみつめ直して良かったです。

ぼくの友だち

瀬田小学校 三年 黒 瀬 良 洋

ぼくがまだ、一年生になったばかりのある朝、いつものように登校はんでならんでいました。すると、ぼくの後ろの方でポケモンの話をしている人たちがいました。

「ぼくも、その話をいっしょにしたいなあ。」そう思っているぼくに、お姉ちゃんが、「いっぺん、声をかけてみたら？」と、言いました。

はずかしかったのですが、さいしょは声をかけられませんでした。でも、三日たって、ぼくは思いきって声をかけてみました。

「ぼくも、ポケモンの話にまぜてください。」

「いいよ。」

と、すぐに返ってきました。

それから毎朝、いっばい話すことができました。登校はんの時間だけでなく、土日の休みの日にもいっしょに遊ぶようになりました。

あの日をきっかけに、ぼくたちは友だちになっただけでいきました。



特選

『破戒』から学ぶ人権問題

東大津高等学校 三年 米田 友夏

私が高校三年間の中で一番印象に残っている人権学習は、二年生のときに行った共同映画鑑賞です。『破戒』は、被差別部落出身であることを隠して生きる主人公、丑松の苦悩を描いています。彼が出身を隠さなければならぬ背景には、社会に深く根付いた部落差別があり、そのために彼は孤独と重圧に苦しみます。この映画を通じて感じたのは、差別が人の心や人生にどれほど大きな影響を与えるかということです。差別をなくすためには私たち一人ひとりが意識を変え、行動することが必要だと改めて感じました。

現代社会にもさまざまな差別が残っています。SNSでの誹謗中傷、外国人や障害を持つ人への偏見、そして学校や職場でのいじめなど、こうした差別や偏見がよくみられます。特に、これらを他人事として見過ごしてしまうと、気づかぬうちに自分も差別の加害者になってしまうことがあると感じました。

私たちにできることは、他人を尊重し、相手の立場を理解しようとする姿勢を持つことです。日常生活の中で小さな行動を積み重ねていくことが大切だと思います。また、差別的な発言を聞いたとき、それに対して否定する勇氣を持つことも重要であると思います。差別を見ないふりをするのではなく、自分の問題として向き合うことが必要だと考えました。

『破戒』から学んだのは、人の価値は出身や見た目では決まらず、お互いの人権を尊重することで、誰もが生きやすい社会を築けるということです。これからも自分の行動を振り返り、人を思いやる心を大切にしていきたいと思います。

特選

男女差別をなくすために

青山小学校 五年 荒川 楓夏

わたしはみんなで仲良くするには人を差別しないことが大切だと思う。その一つとして男女差別をしないことだ。

わたしの身の周りでは、「男の子はいじわるだね。」や「女の子ってやさしくない。」という言葉をよく聞く。わたしも言ってしまうことがある。けれど、女の子も男の子も心の中にあるやさしさや友だちを思う心は全くいっしょだ。そのやさしさを示す行動がちがうだけだ。だから男の子も女の子も仲良くしてほしい。

それでも、男の子のあの行動がいやだから、女の子のあの言動がいやだから、仲良くできないと思う人もいるかもしれない。

もし、自分がいやだ、と思うようなことをされたら、「わたし、その行動いやだからやめてほしい。」とやさしく言えばいいだけではないだろうか。また、男の子も女の子もそれぞれ相手がこの行動がいやだったのか、と知ることができればもっとみんながいい気持ちですぐすくことができるのではないだろうか。また、あの人とは仲良くできる自信がないと思ったら、その人とちよūdよいきより感でいたらよいだけではないだろうか。

男の子も女の子もやさしいところを持つているんだ。ちよūdよいきより感を保っていくことが大切だと思う。そのためには、男の子、女の子のそれぞれ相手がいやだと思うことを考えて、相手のよいところをみつけることが大切だ。



トランスジェンダー

田上中学校 二年 島 田 琉 璃

私いや、僕は最近まで女性として育てられていた。昔から周りの女の子とは少し違っていた。

皆さんはLGBTQという言葉聞いたことがあるだろうか。LGBTQとは、レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダー、クエスチョニングの頭文字を取った略称のこと。僕はこの中のトランスジェンダーとバイセクシャルにあてはまる。

僕は男だ。だけど体は女。僕が性別に違和感を感じ始めたのは幼稚園のころだ。同じ幼稚園に通っていた男の子に、女っぽくないと言われたことがきっかけだった。そのころはまだ、喘息がひどくて、よく悪口を言われていた。当時の僕はまったく気にしていなかったが女っぽくないと言われて自分でも納得した。しかしその時はまだ、自分が男だなんて思っていなかった。

小学校に上がってLGBTQという言葉を知った。中学年位の時に、障害について調べる機会があった。その時に時間が余ったので興味本位でトランスジェンダーについて調べた。生まれてきた体と心の性別が違うことがあることを知った。そして確信した。自分はトランスジェンダーだと。しかしこのことは親には言えなかった。トランスジェンダーにも色々種類があるから自分で一度整理しようと思った。中学校では制服でズボンを選択できたのでズボンを選んだ。中学生になって、女として生きるのが耐えきれなくなつて親に言つて学校にも相談した。学校にも受け入れてもらつた今は、これからどうするかを話し合っているところだ。何人かの友だちにもカミングアウトしているが、そもそもLGBTQのことを知らなかったり理解するのに時間がかかったりする人

もいた。もちろん理解してもらえなかった人もいた。

だから、もっとたくさんの人にLGBTQについて知つて貰うために、理解してもらわなくてもいいから、トランスジェンダーだということを隠すのを止めようと思った。今LGBTQや性別のことで悩んだり困ったりすることがなくなればいいと思う。けれどLGBTQを受け入れないというのも、多様性だと思ふから難しい人権問題だと思つた。

ゲイやレズビアン同士の恋愛を好んで見る人も差別されることが多い。ゲイ同士の恋愛を好きなだけで腐女子、腐男子と呼ばれる。この言葉は心が腐った女子・男子という意味だ。同性同士の恋愛はアブノーマルラブ、異性愛はノーマルラブというのも差別だと僕は思う。このような差別を少しでも減らして、LGBTQや同性同士の恋愛を見るのが好きなことを隠さなくていいような社会になればいいと思う。



なぜ、何のために

堅田中学校 一年 赤 井 穂乃花

人権という権利は全員にある。そのことを忘れてはいけない。授業で「地球のステージ」という戦争のことを考える平和学習の時間があった。話してくださった講師の桑原さんは、「当たり前前のが当たり前ではない国もある。」と言われていた。そのときに考えた。「戦争とは何なのか。」と。戦争では多くの人が体にも心にも傷を負うのに人権は守られているのか。私たちのように当たり前のことが当たり前前にできる日はいつ来るのか。頭の中では疑問ばかりが浮かんでいた。そのために、行動している人たちもいる。心のケアをしに、戦争している国に行ったり、テレビで放送したり。それで、少しずつ人権は守られていくのかもしれない。行動ができない私たちでも何かできることがある。その考えに変わった。すると、「戦争のことについて調べて応援する。」などの方法があることに気づいた。この平和学習で、できることを見つけられた。

もう一つの体験がある。それは「ボッチャ」だ。「ボッチャ」とは、障がい者スポーツの一つであり、ボールを目標の場所に近づけられるか、というものだ。前から思っていた。一つのもので、できる人とできない人がいるというのは不平等だと。そのために「ボッチャ」はつくられたのかもしれない。どんな人でも気持ちや考えていることは同じ。だからこそ「スポーツをしたい。」や「楽しいことをしたい。」という思いは通じ合い、行われるのだ。そして、「ボッチャ」というスポーツがつけられたことで多くの人が楽しんでできるようになったのだと思う。実際に体験したときはクラスで協力した。そのときに、目標の場所に近づけられたらみんな

で手をたたいて喜び合う。遠くにいつてしまったらはげまし合う。そのようなことから、気持ちを通じ合っているんだと実感した。

この二つの経験では、疑問が多く浮かんできた。その中の疑問をまとめると「みんな思うことや考えていることは同じなのに、なぜ戦争やいじめが起きてしまうのか。」ということだ。その理由を考えた。「自分の考えだけで行動や発言をしてしまうからではないのか。」という考えになった。戦争が起きてしまうのは自分の国を守るため。いじめが起きてしまうのは自分の考えで行動や発言をしてしまうため。このようなことなのだ。

これらをなくすために、小さいことで意識できることは「自分と人の感覚が違うことを理解すること」だ。例えば「個性的だね。」と言われてうれしい人もいれば、違う受け取り方をする人もいるかもしれない。このように、感覚は人それぞれ違うということを理解すると、自分の考えで行動や発言をしてしまう人が少なくなると思う。この意識をする人が多くなると、戦争やいじめの火種は絶対になくなる。絶対に、絶対に。



詩

詩の部 講評

今年度の詩の部には、昨年度より約千点多い二四二九点もの応募がありました。

小学校低学年や中学年では、学校生活や家族と過ごす時間を通して、友だちや家族の大切さを実感させられる作品が多く見られました。

小学校高学年や中学校では、日常生活で感じたことの他、戦争や人権について考えをめぐらせた作品が多く見られました。中でも、修学旅行の平和学習と関連した作品が多かったのが印象的でした。

また、全ての学年を通して「言葉」や「あいさつ」についての作品が多く、コミュニケーションの大切さについて改めて考えさせられました。

作品の中には、作品応募をきっかけに「自分自身から変わっていききたい」「自分自身から変えていきたい」という思いが伝わってくるものがたくさんありました。そんな作品を通して、多くの人々の行動が少しでも変われることを期待します。

《特別賞》

ほのぼの賞

「ありがとう」

滋賀大学教育学部附属小学校

六年 長山 結

すこやか賞

「あいさつたのしいな」

木戸小学校

一年 岡山 小夏

ふれあい賞

「笑顔」

和邇小学校

三年 高山 心晴

ときめき賞

「平和と戦争」

富士見小学校

六年 近江 叶音

さわやか賞

「まかせた！バトン」

南郷小学校

四年 鶴谷 美月

△以上 特別賞 五点▽

《特選》

「うれしいことば」

坂本小学校

一年 横山 晴穂

「気持ちのバトン」

小野小学校

三年 吉本 暁音

「失敗」

南郷小学校

四年 矢野 楓汰

「あいさつ」

木戸小学校

五年 堀澤 梨花

「私の幸せ」

田上小学校

六年 奥村 夢依

△以上 特選 五点▽

《佳作》

「たいせつなともだち」

平野小学校

一年 吉村 紬

「兄とわたし」

晴嵐小学校

二年 福田 あかり

「いじめをなくす」

小野小学校

三年 藤井 つばき

「それでいいやん」

藤尾小学校

三年 榎本 健人

「やさしさ」

瀬田東小学校

三年 蓮井 奏

「わたしをよぶ音」

南郷小学校

四年 岩田 いろは

「友だちさ」

南郷小学校

四年 内藤 恭輔

「わたしの人生」

真野小学校

五年 荻田 ちはる

「笑顔」

田上小学校

六年 大谷 結愛

「自分らしく役割を」

打出中学校

一年 佐藤 美桜

△以上 佳作 十点▽

特別賞 ● ほのぼの賞

ありがとう

滋賀大学教育学部附属小学校 六年 長山 結

ありがとう ありがとう

みんなに会えてよかった

苦手な人も 好きな人も

ありがとう ありがとう

この学校に通えてよかった

お母さん お父さん

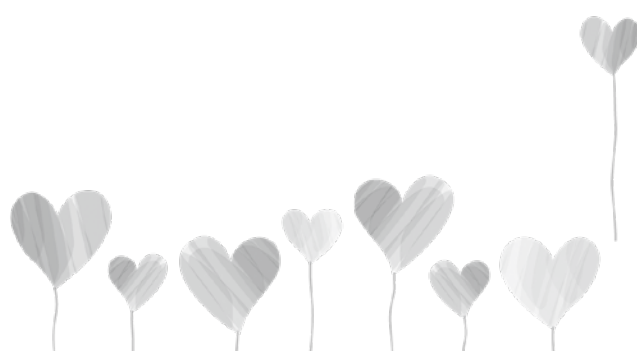
ありがとう ありがとう

思い出を作れてよかった

みんな みんな

生まれてきてよかった

ありがとう



特別賞 ● すこやか賞

あいさつたのしいな

木戸小学校 一年 岡山 小夏

おはようというと

みんながうれしい

おはようというと

じぶんもいい気持ち

おはようというと

こころがあつたかくなる

おはようといわれると

じぶんもごきげん

みんなもごきげん

みんなでこえをあわせてあいさつしたい

おはようって気持ちいい



特別賞 ● ふれあい賞

笑顔

和邇小学校 三年 高山 心晴

あいさつすれば

友だち笑顔

家族も笑顔

自分も笑顔

みーんな笑顔

思いやりの心があれば

友だち笑顔

家族も笑顔

自分も笑顔

みーんな笑顔



特別賞 ● ときめき賞

平和と戦争

富士見小学校 六年 近江 叶音

今日も友だちと笑顔でしゃべった

とっても楽しかったな

明日は楽しみにしていた修学旅行

何があるのかな

お土産^{みやげ}何にしようかな

明日のために早く寝よう

今日も空襲警報が鳴る

すごく怖いな

明日は楽しみにしていた修学旅行

何があったのかな

お土産^{みやげ}選びたかったな

今日もまた防空ごうで寝る

特別賞 ● さわやか賞

まかせた！バトン

南郷小学校 四年 鶴谷 美月

もうすぐバトンが回ってくるぞ

心はドキドキ

足はガクガク

ついに私は走り出した

友だちの「がんばれ！」という声が運動場に

ひびく

バトンが「早く行こう」とさそってくる

かんきやくの声が上がると同時に私の息も

上がる

つらいけど、もう少しで次の人にバトンパス

「まかせた！バトン

いってらっしゃい」



特選

失敗

南郷小学校 四年 矢野 楓 汰

失敗してもいいじゃない
次がんばればいいじゃない

失敗しても人の価値は変わらない
失敗は悪いことじゃない
失敗をしない人はいない
だから失敗をしても大丈夫

人がもし失敗しても
怒ったり
おもしろがつたりして笑うんじゃない
心配したり
笑顔で助けたりした方がいいんじゃないかな

人の価値は、みんないっしょ
だから失敗しても助け合うのが
大切なんだよ
失敗するほど伸びしろがある
だから失敗をおそれないで

特選

うれしいうとば

坂本小学校 一年 横山 晴穂

さそつてくれるおともだちがいるよ
いつもあそぼつていつてくれるよ
さそつてくれるつてうれしいね

まい日学校にいくときに

ままとぱがいつてらつしゃいつて
いつてくれるよ

いつてらつしゃいつてうれしいね

まい日学校たのしいよ



特選

気持ちのバトン

小野小学校 三年 吉本 暁音

わたしの気持ちが
みんなにつたわつて
みんなの気持ちが
みんなにつたわつて
そんな世界が
わたしは好き



特選

私の幸せ

田上小学校 六年 奥村 夢依

これ私の幸せ

お母さんがつくったごはんを食べる

私が好きなダンスをする

これ私の幸せ

妹と弟といっしょに走り回る

仲のいい友だちと遊ぶ

これ私の幸せ

家族全員で買物に行く

ソファ―にすわってテレビを見る

これ私の幸せ

そして、

家族全員で一日のことを話す

これ私の一番の幸せ

特選

あいさつ

木戸小学校 五年 堀澤 梨花

あいさつをしなかった

すこし気がのらなかったから

友だちはあいさつをしてくれた

でも私は返さなかった

悲しいだろうな、私は思った

そして一時間目がはじまった

いまはすこしおちついてる

5分休み

「あのさ」私は友だちにそう言った

「おはよう」

私も、友だちも笑顔だった

